

平成 17 年 7 月 7 日

全国測量技術大会 2005 に参加して

速杵国東支所 本 田 晋 一

6 月 22、23 日、東京ビッグサイトで開催された“全国測量技術大会 2005”の様々な講演を聴き、展示を見て参りました。測量技術の将来形として GPS 衛星の拡充、ユビキタス社会への対応が共通して言えるテーマのように感じました。

GPS 衛星は現在の衛星に加えロシアが計画するグロナス衛星、EU が計画するガリレオ衛星、我が日本が計画している準天頂衛星、と世界各国で整備が進められていますが、それらの配置が完了すれば現在の衛星数（31 基）から 3 倍以上の数となり、それらが測量分野に使用することが出来るようになれば飛躍的に GPS は時間と場所を現在以上に選ばなくなり汎用性が広がるものと思われまます。

ユビキタス社会という言葉はまだまだ耳慣れませんが、簡単にいうと“いつでも・どこでも・だれでも”場所・物の情報を言語、障害の有無を越えて取得する事ができるユニバーサル社会のことだそうです。具体的には超小型の IC チップに 128 ビット（2 の 128 乗）というほぼ無限の重複しない番号が 1 つずつ与えられ、社会全ての物にチップを埋め込むことにより、たとえば生産業のロット単位の品質管理では無く 1 個 1 個々別のトレーサビリティ（追跡調査）が可能となったり、建物や街角に情報が書き込まれたチップを配置して、専用端末（電卓みたいなもの）を近づけると自分のいる場所（建物内では階数などの高さ情報も含めて）や周辺の情報も瞬時に取り込まれて確認できる様になり、位置情報の実験は既に震災後の復旧を兼ねた神戸市で行われているそうです。

各販社ブースでは最新型の機器が展示されており、講演の合間になるべく多くのブースを見学しましたが、測量器に関しては現在の器械の発展型であり、真新しい物は無かったように思いますが、GIS ソフトの進歩ぶりには目を見張る物がありました。今や GIS とは地図上に登録された情報をただ取得するだけでなく、それら情報（地価、人口、気候、・・・もうありとあらゆる）を蓄積してシミュレーションを行い防災管理、人口予測、店舗計画・・・と様々な予測が出来る様になっているものの、各社はそのベースとなる地図・航空写真以外は共有しておらず、現在の各自治体の GIS 普及の遅れから察すると共通フォーマットの出現が GIS を普及させる鍵になるのではないかと感じました。

本大会における全てのベースは“世界測地系”であり、GIS のベースマップとなる地図づくりにおいて“世界測地系”の波は大きな波（下手をすれば津波？）となって我々に迫って来るでしょう。平成地籍整備が推進される中、我々調査士が行う業務も遠からず（法改正では既に）世界測地系が義務づけられるのは必至と思われました。なぜならば、ユビキタス社会に必要なのは統一規格による位置情報であり、同様に GIS も統一された規格（世界測地系）でのデータで運用されているからです。

もはや“任意”なる言葉はどこにも存在せず、世界測地系で地積測量図を積み上げ無け

れば我々の残した成果も今後日の目を見ることが無くなっていくのではないかとひしひしと
感じさせられた2日間でした。